

3. 道内における自給飼料のさらなる高栄養化に向けて

1) 草地輪作の推進

- ・道内の草地では、平均すると更新後5年程度で雑草率が牧草率を超えるとされている。方向性として、5年程度での更新やとうもろこしや飼料用麦類などと組み合わせた輪作が望まれる。

2) バンカーサイロの多層詰め技術の導入

- ・早刈り牧草や高マメ科率牧草、雌穂主体とうもろこし利用など1回あたりの収穫量が少ない原料をバンカーサイロで調製・利用するためには、サイロの多層利用が有効と考えられる。
- ・多層利用の主なメリットは、質や量が異なる複数のサイレージ原料を収穫・利用する場合でも、給与時に複数のサイロを開封せずに済むことである。これは除雪労力がかかる冬季に大きなメリットとなる。主なデメリットは、詰め終わるまでそのサイロを利用できないこと、追い詰めの回数だけそのサイロでサイレージ調製失敗のリスクが増大すること、追い詰め時には原料草をサイロ表面全体に拡散、踏圧する形となるため、重機オペレータの労力が増大する、などである。
- ・道内では、オーチャードグラス主体の採草地を年3回収穫し、それらをとうもろこしサイレージとともに2本のバンカーサイロに詰めている事例がある。導入の主な理由は、冬季間のサイロ開封労力の低減である。

4. まとめ

- ・道内の現状の自給飼料品質は、概して「中低位平準」となりがちである。
- ・北欧では、短期間での輪作が行われ、草地の植生は良好である。道内でも、短期更新（輪作）が行われることが理想的である。
- ・高栄養化された自給飼料は概して収穫量が少ないため、それらのサイレージ調製利用方法の検討も必要である。バンカーサイロの多層利用はその候補の1つである。



写真（左）アカクローバが多い採草地（デンマーク）、（右）バンカーサイロの追い詰め作業（道内）

詳しい内容については、次にお問い合わせ下さい。
道総研上川農業試験場天北支場 地域技術グループ 林 拓
電話 (01634) 2-2111 FAX (01634) 2-4686
E-mail : hayashi-taku@hro.or.jp